
モンスターハンター X

マグネシウム 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスター・ハンターX

【ISBN】

N7773C

【作者名】

マグネシウム²

【あらすじ】

ある村に一人の少年が住んでいた、村が平和なせいかその少年は世界の一般常識「モンスター」「ハンター」という存在を知らなかつた。しかし、ある事件をきっかけに少年は数々の事実を知るのであつた…

— 我「始まつ」（繪書も）

前も回りこみへの書もあつた土俵、今回土俵を上るがおもす！

—我「始まり」

ある村に一人の少年が住んでいた、村が平和なせいかその少年は世界の一般常識

「モンスター」

「ハンター」という存在を知らなかつた。しかし、ある事件をきっかけに少年は数々の事実を知るのであつた…

『ある日』 「ふ～、疲れた～」 右手に斧を持つて左手で額の汗を拭いているのは、先ほど紹介した少年
「ジーク」だつた。父にまき割りをやれと言われやつていたのである。

「かつたり～。何で俺がこんな地味な仕事を…」 と、愚痴を言つていると急に目の前が暗くなつた

「だ～れだ～」と陽気な声が聞こえた、「……この村に若い女は一人しかいね～じゃね～か」軽くため息をつくと、目をおおつている手をどこで振り向いた。そこにはにこやかに笑つている女の子が立つていた。

「あちや～、バレちゃた」と、茶色の長い髪をなびかせながら舌を出して頭をかきながら笑つっていた。

「やっぱ『ミラ』かよ…」この子はこの村の数少ない女の子。村長の一人娘でジークの遊び相手でもある。

「で?なんかようか?」 「うん?ああ、今日収穫祭つて言つのは覚えてるよね?」 ジークはやつとのこと思い出したかのように「……ああーそんなのあつたな～」 「忘れないでよ～。」 「わりいわりい、それで収穫祭がどうした?」 ミラは呆れた顔をして「あのや～、本当に覚えて無いの?」 「収穫祭じたい忘れてたw」 「……はあ」 完璧に呆れはて表情ではなしあげ始めた

「今日の収穫祭は『ハンター』っていう職業の人たちがくるらしいよ」「はんたあ？ケルビとかアプトノスとか激しく刈る奴らか？」
「ジーク、文字間違ってるよ…『刈る』じゃなくて『狩る』だよ…」「おー本当だ！」「ふう…あ、それでね『ハンター』って職業はワイバーンいう巨大な怪物と戦うらしょ」ジークは興味なさげに

「へ～」と軽く返事をした。

ザワザワ…村の中心で人たちが集まっていた。ジークは立ち上がり目を細めて

「ん～、なんだりや？」

「あの人たちだよ！ハンターって！」ミラは目を輝かせて指さした。指の先には鎧を着て背中にかなり大きな剣を背をついている人や小さな剣を持つた人、これまた大きな銃を背負っている人たちがいた。

「かつこいいね～」と、ミラは喜んでいたがジークは顔をしかめて

「……アイツらホントにワイバーンって言う化け物倒せるのか？」たしかに強そうな防具や武器を持っているが、そのハンターが装備してある防具は全て新品同様にきれいだった。

「アイツら化け物と戦つて無傷だったのか？」ミラは少し考えてから「多分…今日のために新しいの買つたのかな～」「そうだといいんだけどな…」なぜか嫌な予感がした。《夜》

「……と、言うことでこの村に近づいてくるモンスターを討伐してくれるハンターのかたがです！」中央広場に集めた村人の前でミラの父親の村長が台の上にたち、ハンターの紹介をしていた。「…

「…なげ～」話が始まつて一分とたたずにジークはもうあきかけていた。その時村長のあがつていた台にハンターの中でもリーダーっぽいやつが台に立つた「我々が来たからにはもう大丈夫だ！」

お、おい…ハンター達逃げてつたぞ…」村人の一人がそう言つとみんな後ずさりしながら

「！」、「こいつどうすんだよ…」その時だつた舞い降りてきた化け物は、獲物を探してゐるかのように首を高くして辺りを見渡しそして、ギャオオオオオオオオン 化け物は急に走り出し人々に突っ込んでいった。うわあー！！ ぐ、くるなー！！！ 助けてー！！ 村人は叫びながら逃げ惑つた。化け物は飛び上がり火球を吐き続けていた。ジークは我が目を疑つた。数時間前までは緑の綺麗な村が、真つ赤な炎につつまれ血の臭いと人の悲鳴で溢れかえっていた。

「なんなんだよこれ…」ジークは呆然と立つていた時、紅化け物はジークに向かつて火球を吐いた。

「！！！しまつ…」死ぬのか…そう思つた時には、体が宙に浮いていたそして勢いよく地面に背を打つた。背中はの痛みはあるが焼ける痛みはない、おかしいと思い立ち上がらうとしたとき、ジークの膝の上にミラが倒れていた。なぜ？ そう思いながらミラを起こそうとしようとした時、ジークは分かつたどうして自分が燃えなかつたのか…あの時ミラが俺をかばつた…ミラの背中はやけただれ、ぐつたりとしていた。

「お、おい…おい……ミラ…」「う…ん…」「大丈夫か…」正直大丈夫な状態ではなかつた、意識はあるものの焼けた背中はえぐれててみるも無惨だつた。

「ジーク…」かすれた声でミラは喋り始めた。
「ば、馬鹿喋…」ミラはジークの口を何とか動く右手でおおつた
「ジーク話を聞いて…ゴホ 私の家あつた昔凄腕のハンターが使つた剣…これを使って…」ミラが握つてている左手の袋の中には透き通るような蒼い短剣と盾が入つていた、

「お父さんに渡そうとしたんだけど私をかばつて…ゴホ だ、だからあなたがこれを使って…あの化け物を…」「分かつた…分かつたから…！！ もう喋らないでくれ…」それを聞いたミラは笑つて「最後まで心配してくれてありがと…ジーク…あなたに会えて本当に良かった…ゴホ 私の初恋の相手があなたでほんとに良かつ…」ミラはジークの手の中で息絶えた、

「お、おい…起きろよー!」こんなこと…あつてたまるかあ!うわあああー!!!!」ジーク天に向かつて叫んだ。頬に一筋の涙が流れた。涙をふきミラをそつと地面に寝かせた、そして火を吐き続ける化け物を睨んだ。ミラが託した武器を手に化け物に向かつて走り出した。

—我「ハンターの仕事」（前書き）

連続いきます！

一一我「ハンターの仕事」

「…………」気がつくと、いつもの一階の部屋で寝ていた。酷く頭が痛い……あれは夢だつたのだろうか？俺の村にハンターが来てモンスターを倒してくれるはずが、モンスターが来た途端アイツ等は逃げ出しそして…………

「ミリ？……父さん…母さん！みんなは！？」その時下の階から声が聞こえた、

「ふう……やつとお皿覚めか…………」聞き慣れない声と一緒に階段を登る音がした。

「だ、誰だ！？」声の主が現れた。全身赤い鎧を身にまとい、背中には巨大な剣を背負つてた。

「俺か？俺はお前の命の恩人だ」

「命の恩人？何言つてるだ、俺はお前なんかに助けてもらつた覚えなんかないぞ！？」鎧の男は兜を外しテーブルに置いた。

「騒ぐな、広場にいる《レウス》が起きてしまう」しかし、ジークは男の忠告を無視し

「れうす？！なんだよそれ！？それよりみんなは？村のみんなは！？」男はベットの前に立ち背中の剣を抜きジークに向けた

「聞こえなかつた？騒ぐなと言つたはずだ……それと一つ、この村の生存者はお前以外いない」それを聞いてジークは呆然とした。あたりまえにあつた幸せ・仲間・家族をたつた一晩で全て失つたのだ。ジークはなんとか口を開き話した

「…………どうして俺は生きてるんだ？教えてくれ……」あの時たしかに自分はあの化け物に向かつて突っ込んでいった、なのになぜ？男はジークに向けていた剣をしまい、椅子に座つた

「いいだろう、教えてやる……」

「俺はこの村の村長とちょっとした知り合いでな、久しぶり会おうとクエストの帰りに寄ったんだ。そしたらこのありさまだ……あろうことかレウスに突っ込んで行く馬鹿まで眼中に入ってしまった。ほっとくのもあれだつたんで、仲間に頼んでレウスを眠らせた。そのついでにお前にも眠つてもらつたつわけだ」

「ば、馬鹿つて…」ジークは少し怒つた顔をしたが鎧の男は鋭い目で睨んだ

「ああ馬鹿だ、レウス相手になんも戦略無しで突っ込むのは馬鹿以外の何者でもない。そんなことする奴はブルファンゴだけで充分だ」言い返そうとしたが、この男の言つてることは事実だ。実際この男が助けてくれなかつたら、俺は死んでいただろ。……

「なあ、一つ聞いていいか?さつきからあんたが言つてる《レウス》ってなんなんだ?」

「レウスは『リオレウス』といつモンスターの名前の略だ。」

「レウスって、強いのか?」

「新米にはキツい相手だ」

「あんたはキツくないのか?」

「まあな…」ジークは腕を組んで

「だつたら倒してこいよ、広場で寝てるアイツを」

「俺一人では無理だ」ジークは呆れた顔して

「なんだよそれ、やつぱお前も口ばつかか?」

「勘違いするな、ハンターとは常に4人で動くものだ、だいたい俺は人間アイツ等は化け物だ。1対1で勝てるほど甘くはない。俺はお前と違つて、命を粗末にするほど馬鹿ではないんでな」何故だかコイツの言うことは説得力があるような気がして、言い返せない… そんな話したをしてると、また階段を駆け上がる音がした…

「ういーすつ」と陽気な声とともに階段から上がってきたのは女だった。鎧の男の仲間だろ?しかし、この男とはうつてかわつて足と腕に鉄鋼みたいな物を装備しているだけで、あとは普通の私服

を着ている。腰には短剣のよくなものを装備しているだけだった

「あ、その子起きたんだ」

「まあな。それより神楽、アイツ等呼んどいたか？」神楽？この女の名前だらうか？そんなことを考えながらジークは、一人の話を聞いていた。

「うん。ゼロはもう持ち場についてるよ。けど、セバスチャンはどうだろ？、少し遅れるってさ」それを聞いた鎧の男は少し考えこんだ。

「どうする？セバスチャン待つ？」神楽がそう訪ねると

「……いや、今倒す。レウスくらいなら三人で充分だ。」

「OK隊長、んじゃゼロに伝えてくるね～」と言つて家を出ていった。

「どれ、準備をするか…」そう言つて兜をかぶり直し立ち上がった「ちょっと待つてくれ！」家から出でていこうとした鎧の男を呼び止めた。

「……なんだ？」

「俺も一緒に戦わせてくれ！頼む

「ハンターの仕事をなめるな、足手まといだ。」

「でも、俺：敵をうちたいんだ…それに、逃げてつた腰抜けの奴らだつてハンターになれたんだ、俺だつて…」

「……意気込みはかう、だがそれは無理な相談だ。」

「でも…！」

「いいからー！お前は見てる。本当のハンター仕事を、戦いを

「分かつた！」その言葉を聞いた鎧の男の口から以外な一言がでた

「……お前の名前は？」余りにも唐突に聞かれたので、一瞬戸惑つたが

「ジーク、ジーク・ハルス」

「…奇遇だな、俺の名前もジークだ。ジーク・ニコル」それだけを言つと外に出ていった。外に出ると、神楽が扉の横に壁にもたれて

待っていた。

「悪い、待たせたな。」

「んにゃ、別にいいよ～。」と言つと、神楽は微笑した。ジークが不思議に訪ねた

「?、どうした?」

「ジークが名前教えるなんて珍しいじゃん」それを聞くとジークは遠い目をした。

「…アイツは俺に似ている。一瞬で幾つもの大切な物が消えた辛さ、何も出来なかつた自分の無力さが今アイツを苦しめている。」頭の後ろで腕を組

「へ～。で、手をかすつもり?」ジークは首を振り

「いや、これはアイツが解決しなければならない。それより気になつてたことがあるんだ。」神楽は不思議そうにジークの顔を覗きこんだ

「どつたの?」

「普通モンスターは滅多なことで村を襲つたりはしない。それに、襲う理由がない。こここの村の周りにはケルビやアプトノスが豊富にいる、それなのになぜ…」神楽もジークと一緒に考えていたが、すぐ位に考へるのを止めて。

「あ～～んも～～。考えごとはアイツを倒してからでいいじゃん～」
ジークは、ふうとため息をつき

「そうだな、それじゃあ始めるか。ゼロ頼む!!」ジークが叫ぶと、どこからともなく弾がとんできて、レウスの背中に直撃した。あまりの痛みにレウスは起きだした。ギヤオオオオオオン!!…と、声を轟かせた。

「やっぱり迫力だけは、いつちょっとあるね～」と、余裕の表情で挑発をし始めた。

「来てみろバーか!」神楽はレウスの前で飛び跳ねたり、角笛を吹いた。レウスは迷うことなく神楽の方を睨み突進体制に入り、足で大地を蹴ろうとしたとき

「はい残念、ドッカーン」なんとレウスの足元には落とし穴が仕掛けた。

「それじゃあ、いくよ！」かけ声と同時に、落とし穴にはまつているレウスめがけて常人とは思えないスピードで、レウスに近づいた。

「韋駄天の神楽ちゃんをなめんなよ……」腰から抜いた、細い短剣で次々とレウスの頭や翼爪を破壊していった。レウスが畠から抜け出した頃には、体全体がボロボロになっていた。

「ジーク、あとはよろしく、アタシは得意のナイフで援護するから～」

「了解だ」そう言つと、ジークは背中の剣を抜いた。驚いたことに、あろうことか巨大なあの剣を片手で持つてゐる。

「ゼロ、神楽、麻痺を頼む」それを聞いた神楽は腰についてる袋から、小さなナイフを五・六本取り出し。

「OK、くらえ！！」と、レウスに投げた。また、別の方方向からも黄色い閃光の弾が何発もとんできて、レウスに全弾命中したとたん、レウスは動かなくなつた。

「今だよジーク！！」神楽が叫ぶと同時にジークは走り出した。レウスの正面に立ちそして、巨大な剣をまるで短剣のように軽々と何度も頭中心に振り下ろした。麻痺が切れ立ち上がつたが、流石に体力の限界がきて崩れるように倒れた

『家中』家中にいるジークは声が出なかつた。初めて見た腰抜けハンターとはまるで違つ。鬼神のごとく強いハンターが今日の前にいた。その時初めて分かつた、これが本当のハンター……『モンスターハンター』なんだつて事が……『村の広場』

「さつすが！ジーク！！あんたがいると楽だわ～ あんな芸当ジークにしかできないよ」ジークは剣を戻し

「こんなこと力さえあれば誰でも出来ることだ……」

「ねえ、トドメささないの？」と、不思議そうに聞いた。ジークは、もう一人のジークのいる家に向かつて叫んだ。

「あとは、お前がやれ！敵をとるんだろう！？」神楽も納得した顔で剣をおさめた。家から出てきたジークの手には、ミラに託された蒼い剣が握り締められていた。そして、リオレウスの前に立ち、後ろにいるジークと神楽に

「……あんた達ありがとな」と、言つと神楽は笑つて

「まあ、本当はもう一人いるんだけどね～。もう、いつちやつたかな？」ジークは冷静な顔で、

「アイツはあれで忙しい。報酬の無いこの仕事来てくれただけでもありがたい…さあ、ひとつとどごめをさせ」ジークは頷き、剣を振りかざそうとした時、最後の悪あがきか、首をムチのようにしてジークを吹っ飛ばした。

「まじ！？アイツ動けんの？！」と、神楽が呆れた声で言った。さらにレウスは起き上がり、先ほど吹っ飛ばしたジークめがけて体当たりしていった。

「まずい！」神楽と一緒にいたジークは、駆け出したが間に合わない。

「アタシの足でも間に合わないよ！？」吹っ飛ばされたジークは、自分に向かつて走つて来るレウスを見て（俺、やっぱりコイツにころされるのか…）諦めたその時だった！

誰もが諦めたその時、ドオオオオオオン！！！と、激しい爆発音が轟き、凄まじい土煙が舞い上がった。レウスは、ジークの目の前で倒れた。神楽は足を止め叫んだ

「遅すぎ！セバスチャン！」土煙の中から丸みをおびた武装を身につけ、手には槍？と盾を持った奴が現れた。

「H A - H A - H A - ヤハリ M e ガ、イナイト Y o u 達はダメネ
」神楽はむくれた顔で、

「あなたが最初からいれば、こんなことにはならなかつたんだろ～

が！！

「カグラさん、アナタ細力イ事氣ニシ過ギヨ。！」 神楽とセバスチャンが言い争いをしているのをジークは無視し、倒れているジーグに

「ほら、さつさと立て。セバスの一撃でほぼ瀕死だ。はやく殺らないと死んでしまうぞ」それを聞いたジークはすぐに立ち上がり、剣を握りなおした。剣を振りかざして、

「これで、これで終わりだあ！！」 剣はレウスの頭に突き刺さった……ジークは自分で気づかない内に泣いていた。神楽とセバスチャンその姿を見て騒ぐのを止めた。ジークは黙つて見ていた。

「もし、もしも村に来たハンターがアンタ達だつたら……」 ジークは涙を拭いながら言つた。遠くで見ていたジークは、「お前、強くなりたいか？」と、言い放つた。

「え？」 驚いたような顔で、ジークを見つめた。

「今回の騒動は、おかしな事が多々ある。この事件、もしかしたら裏で糸を引いてる奴がいるかもしない。そいつ等を見つけ出した時、そいつ等に復讐できるだけの力は必要だろ？」

「で、でもどうやって…」 ジークは背中の剣を抜き泣いているジーグに向けた

「俺が鍛えてやる。だが、妥協やあまい修行は一切しない。それでいいならついて来い」 ジークは涙を拭き、

「よろしくお願ひします！！」 と、お辞儀をした。剣をしまい

「そうか。神楽、セバス俺はしばらくチームから抜ける。」 神楽とセバスチャンは、

「OK！早めに帰つて来てね～」

「イエッサ～ボス！！」 と言い、一人は町を出ていった。

「そうだ、俺達の名前は一緒に面倒だ。俺のことは、二コルと呼べ」 ジークは笑つて

「了解！」 と、言つて二人も村を出て行つた

三我「旅立ち」

『『？？？』 真っ暗な部屋の中心に明かりがあり、そこに数人の人と椅子に座る男がいた。

「……で、あの村は潰してきたか？」 椅子に座っている男が部下?のような者に訪ねた。

「はつ！ 昨夜、レウスにあの村に放つてきました」 男は不適な笑いをした。が、その時奥の方から誰かが走ってきた。

「た、大変です！！ レウスを回収しに行きましたら、倒されておりました！！」 椅子に座っていた男は、驚いた表情で

「ば、馬鹿な！？ あんな村に何が出来る！ ハンターを雇つたとしても、大したハンターなど雇えぬはずだ！！」 すると、報告をした男が「そのことなんですが… あくまで聞いた話しだすが、レウスを送つた次の日、村の方角から『サイレント・キル』を見たそうです。」

椅子の近くにいた男が

「あいつ等じゃない？ 僕達の邪魔するのアイツ等くらいしかいないでしょ？」 それを聞いた椅子の男は、怒り狂った顔をして

「またアイツ等かあ！！ 我々の邪魔ばかりしあつて！！」 報告をした男はさらに話し続けた

「それと… まことに申し訳ないのですが… 蒼剣が見つかりませんでした… それと、見間違いかもしれませんが『ジーク』を見かけたのですが、子供と一緒にいました。その子供が蒼い剣を腰につけていたんです」 椅子の男は考えこみ

「……ダメ元で、調べてみるか…。そのガキの顔は覚えているな？」

「はつ！」 男は立ち上がり

「コイツと『雷帝のセレノス』を向かわせろ！」 そう言い残すと、男とその周りいた者たちは部屋からでていった

『『あれから三年後の密林』一人のハンターが、密林のど真ん中で立っていた。赤い鎧を身にまとい、腕を組みじつとしていた。男は急に背中の太刀を握り、つぶやいた

「……くる！」すると、木々が揺れ空からピンク色の大怪鳥が男めがけて、下降してきた。剣を抜いた男は高速で剣を振り、怪鳥の両羽を切り落とした。怪鳥は地面に転げ落ち、あまりの痛みにのたうち回っていた。なんとか立ち上がり逃げようとしたとき、男は怪鳥の前に立ち体を一突きした。

「ミッションコンプリートだ」怪鳥から、剣を抜いた。怪鳥はすでに息絶えていた。すると、後ろの方から拍手をしながら近づいてくる音がした。

「流石だね」現れたのは、神楽だった。男は剣をしまい、振り向いた

「なぜここにいるのが分かつた？」神楽は、ニコッと笑い

「あなたの師匠に聞いてきたんだよ」「ふうとため息をつき、兜と外した。

「しかし、変わったね。ちょっと前はランポス倒すのにも手こずっていたのに。成長したね』『ジーク』』そう、その男は三年前、リオレウスによつて壊滅させた村のただ一人の生き残り、泣き虫ジークであつた。今では身長も伸び三年間厳しい稽古に明け暮れたおかげで、髪は伸び見方を変えると女に間違えてしまつほどであつた。

「……報酬貰いに帰るか」そつまつと、その場をあとにした。神楽は

ふうとため息をした

「アーッ、剣の腕だけじゃなくて、田つきや口調まで『一ノル』に

似てきやがつた…」神楽は疲れた顔でジークについて行った。《村

の出口》村に帰ったジークは、休む間もなく

「話がある」と言つてニコルと神楽を呼びつけた

「何か用？」神楽は、いきなりの呼び出しに不思議を隠せなかつた。一方ニコルは、黙つたまま立つていた。ジークは

「俺、この村を出ようと思つてるんだ。もう、村を出る準備も出来た。三年間も世話してもらつて悪いんだけどさ…俺もある程度強くなつた。だから…俺みたいな人達がでないよ!」…」神楽は、軽くため息をすると

「あんたね〜、自分で決めた事を私たちが止める権利なんかないのよ。それがしたいなら、精一杯やつときな！」そう言つと、ニコラと笑いジークの肩を軽く叩いた。ニコルは、後ろを向き

「神楽の言つとおりだ。そんなことでわざわざ呼ぶな。」ジークは少し寂しい顔をして

「そつか、それじゃあ行くな。……今までありがとな」ジークが荷物を背負い、村から出ようとしたとき

「……気をつけろよ」ニコルは、振り向かずつぶやいた。ジークはその一言には気づかず出てつた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7773c/>

モンスターハンターX

2010年10月13日08時24分発行